第４回「相米慎二監督映画祭り」開催記録

【青森県　田子町（たっこまち）】

【会場・ロビー】 入場待ちの列、頂戴したメッセージや監督作品ポスター、遺族からお借りした資料などを展示しました。

【トークショー・抽選会】撮影時のエピソードや相米監督にまつわるたくさんのお話が紹介され、お客様も大満足の様子でした。

【お墓参り】　相米監督の令兄 相米琢磨さんと関係者の皆様で相米慎二慰霊碑へ、相米監督の眠る墓前で静かに手を合わせました。

【交流会】

映画祭り終了後、「映画監督相米慎二を語りつぐ会」が交流会を催し、関係者と一般参加者が親睦を深めました。

【新聞掲載】 東奥日報社、デーリー東北新聞社

町ゆかり「相米慎二監督映画祭り」

厳しくも愛情たっぷり

作品出演の河合さん、原さん エピソード披露し感謝

田子

田子町ゆかりの映画監督・故相米慎二さんの魅力を伝える第4回「相米慎二監督映画祭り」が2日、町タプコピアンプラザホールで開かれた。約270人の来場者が、監督3作品目の「ションベン・ライダー」（1983年）を鑑賞し、出演した河合美智子さん、原日出子さんらのトークショーを通じて、相米監督の人柄や作品の魅力に触れた。（藤本雄大）

相米監督の思い出や撮影時のエピソードを語る河合美智子さん㊧と原日出子さん

「セーラー服と機関銃」「魚影の群れ」など13作品を世に送り出した相米監督は2001年に53歳で生涯を閉じ、父の出身地・同町相米地区にある先祖代々の墓で眠っている。映画祭りは町が主催し、14年から毎年開いている。

「ションベン・ライダー」は、出演者がスタントなしでアクションに挑んだ、自由なエネルギーにあふれた作品。この作品で映画デビューを飾った河合さんは、暴力団に誘拐されたガキ大将を救出しようと奮闘する中学生「ブルース」を演じた。

上映後のトークショーでは、相米作品で助監督を務め、現在は映画監督でもある桜美林大教授の榎戸耕史さんらが聞き手となって、河合さん、原さんが撮影時のエピソードなどを語った。

河合さんはトークショーの冒頭、過酷だったという撮影を踏まえ「（相米監督）被害者の会代表です」とあいさつし来場者を沸かせた。「撮影したのは中学2年生の夏休み。その間は自分という存在がなくなって、ブルースという役として生きていた。役者としてこんな経験をさせてもらった相米監督に感謝している」と振り返った。

先生役で出演した原さんは「アクションではけがの連続。小手先が通用しないし、命懸けでやらないと『OK』が出なかった。ただ、相米監督の愛情をたっぷりと感じた撮影だった」と笑顔で語った。

つたえる地域　つながる地域

相米慎二監督との思い出を語る河合美智子さん（左）と原日出子さん

相米慎二作品 魅力を語る

町内に眠る田子ゆかりの映画監督

映画祭り 俳優の河合さん、原さん

田子

田子町ゆかりの映画監督で町内に眠る、相米慎二さんの功績をしのぶ「第4回相米慎二監督映画祭り」（町主催）が2日、同町のタプコピアンプラザホールで開かれた。1983年公開の映画で3作目の「ションベン・ライダー」に出演した俳優の河合美智子さん(49)と原日出子さん(57)がゲストに招かれ、エネルギーに満ちあふれた相米作品の魅力を語った。（金澤一能）

映画は、河合さんらが演じる中学生3人が、誘拐されたいじめっ子の同級生を救い出そうとし、暴力団の抗争に巻き込まれてしまう物語。

当時14歳で、デビュー作となった河合さんは「どのシーンも出演者が生き生きとしていて、一つもうそをつかず、その場で生きている」と見どころを紹介。

先生役の原さんは「役者は芝居を考えるが、監督はそれを壊す。考えたふうに見えると延々とテストをし、最後はむき出しの感情が残った」と振り返った。

作品では激しいアクションシーンが数々登場する。台本になく、監督が現場で作り上げることも多かったといい、そのほとんどを役者自身が演じた。〝被害者〟という二人は「命懸けだった」と体当たりで挑んだ撮影を懐かしんだ。

会場には町内外のファンら約270人が訪れ、トークショーや作品上映を楽しんだ。